

Young People's Chorus of New York City

特別レポート

第4回日本公演ワークショップから

ニューヨークに拠点を置く Young People's Chorus of New York Cityは、国籍・宗教・文化など境遇の異なる子どもたちが集まる合唱団です。ヴァンでは、彼らが来日時に行ったワークショップを訪ねました。取材をお願いしたのは、アメリカで音楽を学んだ新進気鋭の作編曲家・指揮者の佐藤賢太郎氏。

音楽教育の可能性や実践方法について、指導者のニュネズ氏に鋭く迫っていただきました。



ワークショップに参加して

佐藤賢太郎

「ヤングピープルズコーラス・オブ・ニューヨークシティー」(以下YPC)は、米国ニューヨーク市に本拠地をもち、現在、7つの合唱団に7歳から18歳までの子どもたち約1200人在籍している全米でも有数の児童合唱団である。日本ツアーは今回で4度目。演奏をご覧になる機会があった方なら、その「表現力」に強い印象をもたれたであろう。本記事は8月2日に東京音楽大学で行われたワークショップ「異文化教育とその実践」の中でのYPCの音楽監督であるフランシスコJ. ニュネズ氏の語りを中心にレポートする。

音楽には 音 人を变える力がある

YPCは、1988年に大学を電気工学専攻で卒業したばかりの当時23歳のニュネズ氏によって、たった9人の合唱団として始まった。団の設立にあたってニュネズ氏の目標は明確であった。それは「社会的変



○Francisco J. Núñez

革」と「高い芸術性」という2つのキーワードにまとめることができる。

「音楽には人を变える力があります」とニュネズ氏は語る。「最近では、そのことは科学的に実証されつつあります」と、最近の研究例などをいくつか挙げながら、ニュネズ氏は続ける。「そのことは皆さんも実感しているはずですが、私がそれを初めて意識したのは、音楽を長く続けた人は概して大学進学をする、ということを感じたときでした。そして米国では、高等教育を受ける、ということは貧困層から抜け出す大きな道なのです」。

ニュネズ氏の家庭は裕福ではなかったが、彼は小さい頃からピアノを習っていた。そして、そのことがニューヨーク市の下町という治安の面で恵まれない環境の中で、彼をドラッグや犯罪から遠ざけるこ

とになった。「家庭が裕福だから音楽を習うことができるのではなく、音楽と音楽を通して学ぶことが結果として貧困につながる道から人を救うのだ、と感じたのです」とニュネズ氏は言う。「そして音楽には人種や文化、経済格差といったものを乗り越える力がある、と私は信じています。バラバラになりがちな社会や人をまとめる力が音楽にはあるのです。音楽を核として、いろいろな人が集まる多様性にあふれた団体をつくること。そして、その音楽と多様性の中で人や社会をよい方向に変化させること。これがYPCの目標の一つです」。

音楽を通して自分とは違った 音 文化の人々のことを理解する

もう一つのキーワードである「高い芸術性」についてニュネズ氏は続ける。「私たちの合唱団にはオーディションがありません。そして、YPCの合唱団には能力別という考え方はなく、どの団が歌うのかを決めるのは、年齢と混声か同声かという選択のみです。団の優劣という考え方はありません。その年齢やアンサンブルにしかできない最高の表現を目指すことが私たちの目標の一つなのです。私たち大人は、どちらかというと子どもに芸術性を求めない、というか、芸術性を得るのに適した年齢や技術を身につけるのを待ってしまいがちなのですが、それは間違っていると私は思います。最高のものを求め、そして適切な段階を踏めば、子どもたちは必ず成長し、時にはこち



ワークショップの様子

らの期待以上に応えてくれるのです」。

では、具体的にどのような活動や練習をしているのか？という質問にニュネズ氏はこう答える。「まず、それぞれの合唱団は、週に1回か2回、学校の放課後にあたる時間に約2時間のリハーサルを行っています。オー



○さとう・けんたろう

ディションがない分、入ってくる子どもたちの知識や技術には差があるので、私たちは楽曲や歌唱技術はもちろん、立ち方、座り方、服装やマナーといったことも教えます。各合唱団には年齢や性別を鑑みて組まれたカリキュラムがあります。それはコダーイ・メソッドやその他のメソッドを組み合わせたものですが、いくつかの決まった楽曲を通して楽譜の読み方や理論といったものも教えていきます」。そしてニュネズ氏は続ける。

「できる子どもたちが、そうでない子どもたちを助けるといった、子どもどうしで教え合うということも活発に行われています。私たちの団では時には振付師に、動きを考えてもらうこともあります。ダンスが得意な子どもたちなどが必要と感じたら積極的に振り付けを考えることもあります。その年代の長所や短所、興味を的確にとらえ、常に子どもたちが意欲的に挑戦できる環境をつくるということを大切にしています。私たちYPCは設立から多様性ということを重視してきたこともあり、古典作品はもちろん、ポップス、ミュージカル、現代音楽や委嘱作品、そして特に他言語や他文化の楽曲に積極的に取り組んでいます。ある楽曲を通して、異なる時代や言葉に触れ、音楽を通して自分たちとは違った文化や人々のことを思い理解するきっかけとなるよう促しています。つまり、多

様な人々と、多様な音楽に取り組み、文化に触れ、そして共に豊かに成長することが、私たちが実践する異文化教育なのです」。

自分の表現を共有する場所がある

ワークショップの間、要所で行われたYPCの演奏はほんとうにすばらしいものだった。子どもたちが心から演奏を楽しみ、そして観客に楽曲のもっているメッセージを伝えよう、という気持ちがほんとうに全身から溢れている。子どもたちに聞けば、新たな団員というのは、現団員が友達を誘うということがほとんどだという。すてきなことだ。自分たちの居場所、自分の表現を共有する場所があるという喜びに満ちた演奏を聴きながら、私は米国が「表現の国」である、ということに改めて感じた。人種や文化が様々な人々が集まる土地だからこそ、自分の気持ちや考えを表現し伝えることを大切にする国なのだ。

YPCの活動は、米国内はもちろん世界各地でも認められ、その方法論やメソッドを学びたいという国や団体は多い。それについては別の機会に紹介するとして、まずYPCの成功の根底にあるのは、明確で他を説得するに値する目標の設定だったのは間違いないだろう。「なぜ音楽を、なぜ合唱をやる必要があるのですか？」と問われたとき、ニュネズ氏にはその答えがあった。みなさんは、自信をもって自分の考えを明確に伝えられるだろうか？

*

○佐藤賢太郎 (Ken-P) 作編曲家・指揮者

静岡県立浜松西高等学校を卒業後、渡米。サンタモニカ・カレッジにて映画と音楽の学位を取得後、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校にてメディア作曲科で学士、大学院合唱指揮科で修士を修得。現在、指揮者および指導者としても活動し、合唱や作編曲法のワークショップも開催。芸術関連や知的著作物関連の書籍出版、作詞など、多方面で活躍している。



授業者に訊く— ①

今回の「授業者に訊く」では、小学校・中学校ともに埼玉県の学校を訪ねました。

川口市立在家小学校で参観したのは、5年生の鑑賞の授業です。発言を求められると、子どもたちはどんどん手を挙げて感じ取ったことを発言し、そして友達の意見をしっかり聞いていました。

授業者：駒崎玲子（川口市立在家小学校）



本時の授業の位置付け

本校では「国語力を育て、伝え合う力を高める指導法の工夫」を研究主題とし、音楽科でも、音楽に対して主体的・創造的に関わり、自分の思いや考えをもとにして表現できる子どもの育成を目指しています。

本時は8時間扱いのうちの第8時です。今回の題材では、音の重なりとアクセントについて取り上げ、これまでに表現『いつでもあの海は』『リボンのおどり』と、鑑賞『アイネ クライネ ナハトムジーク第1楽章』の授業を行いました。題材内での授業の関連を踏まえ、本時では「楽器の音色や曲の特徴を感じ取るにより、楽曲のよさを味わって聴く」を目標に、『双頭のわしの旗の下に』を鑑賞します。



中川昇次 先生
川口市立在家小学校校長

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・ 学習活動	● 指導上の留意点 ☆ 評価【評価方法】
導入	○ 「声づくり」で挨拶。 ○ 月の歌『大きなうた』を歌う。 ○ 本時のめあてを知る。	● 口形に気をつけるように声かけをする。 ● 姿勢や口形、出だしの言葉などに気をつけて歌うようにする。
展開	[]* に注目して、聴きくらべて曲のステキなところを感じ取ろう。 ○ 前時に鑑賞した『アイネ クライネ ナハトムジーク第1楽章』の特徴を思い出し、確認する。	● 曲の冒頭だけ聴き、イメージを想起させる。 ● 前時までの学習内容を、拡大紙を見ながら確認できるようにする。 ● 拡大楽譜とも関連させて確認できるようにする。
	言語活動の充実 ○ 『双頭のわしの旗の下に』を鑑賞し、聴きくらべる。 ・ 鑑賞カードの項目を基にして、鑑賞する。 ○ 気付いたことや、感じたことを発表する。 ・ カードに記入したことをもとに、発表する。 ○ 2曲の特徴について学習のまとめをする。 ・ 楽曲の特徴を子どものことばでまとめる。	● 鑑賞のポイントを確認して、鑑賞させるようにする。 ● 個々の意見を認め、共感しながら発表できるようにする。 ☆ 楽曲の特徴を感じ取り、自分の言葉で表現している。 【表情観察、発言内容、記述内容】 ● おすすめポイントに記入する。 ☆ それぞれの曲の特徴を感じ取っている。 【表情観察、発言内容、記述内容】
まとめ	○ DVDを鑑賞する。	● 板書したことについて確認する。 ● 今後の活動に生かせる内容を確認する。

*子どもがそれぞれ注目するところを記入する。

学び合いで育つ表現する力

聞き手：蝦 真理子（日高市立高萩小学校）

子どもの思考の流れを大切に

蝦：今日の授業では、先生の質問に子どもたちが積極的に手を挙げて発言していました。とてもうらやましいです。
駒崎：子どもたちの発言はなんでも受け入れようと心がけています。今日も鑑賞した吹奏楽の楽器の中に「ヴィオラが聴こえた！」という発言があったときは、「ああ…」と思ったのですが。



○こまざき・れいこ
川口市立在家小学校教諭

蝦：そうでしたね。
駒崎：でもまずは否定せずに受け入れます。私が言うってしまうのは簡単ですが、どこかで子どもたちに「違った」ことをきちんと確かめてほしいのです。
蝦：『双頭のわしの旗の下に』を初めて聴いた子どもたちから、前回鑑賞した『アイネ クライネ ナハトムジーク』と比べて…、という言葉が出てきました。ああいうときは「チャンス！」という感じですか？
駒崎：そうですね、よかったと思います。あえてそこへ引っ張っていく指導もありますが、私は子どもの思考の流れを大切にしたいと思っていますので、そこに行き着かなければ指導計画が甘かったのだろう、と。もしくは今日の目標やねらいがこの子たちには違って

たんだろうなと考えます。
蝦：子どもが「繰り返したところは似ていたけれど、雰囲気が違う」と発言したことに対して、先生は「どう違うの？」と聞き返されました。そうしたら「こっちは大人っぽくて、あっちは子どもっぽい」という言葉が出てきました。それに対して「ぼくは反対に感じたよ」という意見もありました。「自分はこう思う」ということが言えるんですね。
駒崎：「えー！」って否定する子がいなからかもしれません。そう言われたら、意見が言えなくなってしまう。言えない雰囲気を作ったというか、言わさないというか…。だから「えー！」と誰かがいう前に私が「そうだね」と言うこともあります(笑)。
蝦：反対に感じたとしても、それはそれでいいですね。
駒崎：たとえ一人だけの意見でも発言させたいと思うのです。

発言を全体のものにする

蝦：子どものつぶやきを大切にしている先生の姿が印象的でした。「もう1回聴きたい」という子どもに「そう、聴いてみたい？」と、聞こえないふりをせずにきちんと答えつつ、「このあとDVDで確認したいな」と返しておられました。
駒崎：迷ったんです。もう1回聴かせようかと。もう1回聴いたら深まるかもしれないけれど、やはりここは譲れないと思ったので、「あとで確認しようね」と言いました。
蝦：でも曲をもう1回聴きたいと言ってくれるのはうれしいことですよ。
駒崎：教師としてはうれしいですよ！この曲に興味をもってくれたというこ

とですから。
蝦：曲を聴いて「行進」や「マーチ」と発言する子どもがいました。先生が何も説明していないのに驚きました。
駒崎：今日は「スキップ」という子どもの発言の扱い方に迷いました。〔リズム〕として「スキップ」という言葉が出ることは多いのですが、今日は〔イメージ〕として「スキップ」が出てきました。「スキップ」と「歩く」は速さが違うということでも取り上げられますし…。
蝦：「スキップ」が出たときに、私もドキッとしました。でも先生は〔リズム〕ではなく〔イメージ〕のところに板書なさいましたよね。
駒崎：〔イメージ〕として発言していることを子どもに確認しました。子どもの発言した言葉を板書し、全体のものにするというのが、私の役割です。まとめていくとき絶対に落としてはいけない作業なのですが、今日は取り上げませんでした。最後にDVDを鑑賞しながら板書を見ましたが、気持ちよく鑑賞したのに、私があえて「このスキップはね」と持ち出すのも子どもの思考の流れに沿わないと思ったのです。



○えみ・まりこ
日高市立高萩小学校教諭

〔共通事項〕は意識させない

蝦：〔共通事項〕についてはどのように意識して指導されていますか？

駒崎：私の授業は、歌も器楽も楽曲分析から取り組むことが多いです。まずはCDも聴かずに楽譜を見ることから始めます。楽譜を見て気付くことに○や印をつけます…音楽の記号の中でト音記号を見付けるだけでもいいし、速度記号に○をつける子もいます。歌詞の言葉に目を向ける子もいます。

蝦：最初に丁寧に楽譜を見てから、歌って確認するのですね。

駒崎：器楽もそうしています。1パートにあるこの形は、2パートのここにもある。この部分はいっしょに演奏してないね、主旋律が動いているんだね、と気付きます。

蝦：〔共通事項〕から入るのではなく、授業の自然な流れから学び取っていくのですね。

駒崎：〔共通事項〕やろうよって言われたら、子どもは嫌じゃないかなと思うんです。

蝦：そうですね。知らない間に力がついているからこそ、たくさん言葉が出てくるのですね。先生は〔共通事項〕が示される前から、鑑賞ではこのようなスタイルで授業をされていたのでしょうか？

駒崎：楽曲分析を始めてから2～3年後に〔共通事項〕が出てきたように思います。自分が楽曲分析をしていたことは間違っていなかったんだと思います(笑)、鑑賞にも生かしています。子どもたちは音の動きにはよく気付くようですが、リズムは聴き取りにくい傾向にあると感じます。〔共通事項〕を意識した項目に分けて板書をしています、リズムに関連する言葉はなかなか出ま

せん。付点のリズムはまだ気付きやすいようですが、今日のように流れてしまうと聴き取りにくいようです。他のクラスでは「音が強いと速い感じがする」「音が弱いと遅い感じがする」というように、強弱と速度には絶対関係があるという意見もありました。

最初は音から

蝦：子どもたちは楽器のことについてよく知っていました。なにか特別なことをなされていますか？

駒崎：できるだけ本物に出会わせたいので、実際に楽器を見せています。学校にある楽器や、自宅にある楽器…ヴァイオリンが小さいサイズからあるものですから、「ヴァイオリンってひとつの大きさじゃないんだよ」と小さいサイズから見せます。金管楽器については、金管バンドがあるのでよくわかっているようです。友達が吹いていますし。木管楽器については4年生の『クラリネットポルカ』や『パディネリ』のときに、本物のクラリネットとフルートを見せました。

蝦：本時では始めはCDで音だけを聴き、最後に映像として吹奏楽で演奏しているものを使われているのがとてもよかったと思いました。

駒崎：行進している写真を見せなくなかったのも、教科書を開かせませんでした。内容によっては、イメージが植え付けられてしまいますから。同じ理由でふだんはあまりDVDも使いません。耳を育てたくて、CDばかりです。でも演奏しているDVDが手に入ったので、「見ちゃおうっ！」と。

蝦：いいですね。そのおかげでヴィオラ

がないと確認できました。イメージを広げたり受け止め方を考えたりするときには、演奏だけの資料の方がいいですね。確認のためのDVDを子どもたちは食い入るように見ていました。

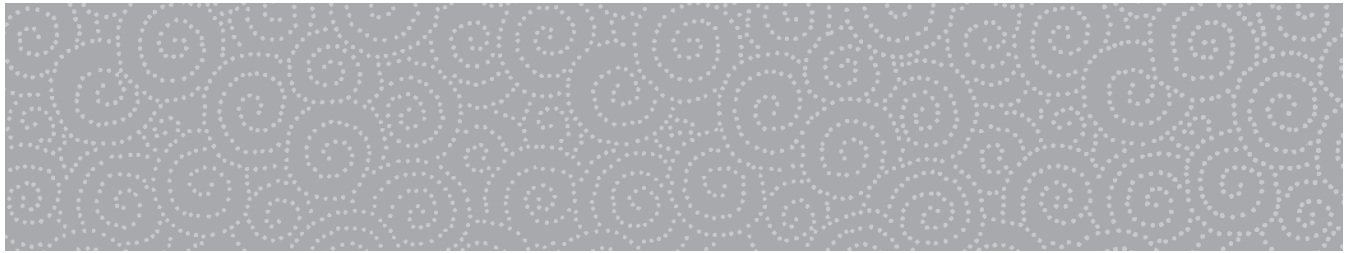
駒崎：DVDを見せてしまうと映像が目がいってしまうので、最初は音だけにしています。



「なぜかというと」に

蝦：プリントに書き込みをするときに、ヒントとして黒板に貼ってあるカードを見せるのですか？

駒崎：カードは音楽的環境として常時見ることができます。カードの言葉は、すべて子どもたちから出た言葉なんです。例えば「のっとり」という言葉は国語的にはバツですが、今日の子どもたちが3年生で映画『アラジン』の『新しい世界』を聴いたときに、「のっとりした感じがする」という発言が出たのです。「こんな感じ」とその子が歩いて見せたら、みんなが「ああわかった。この曲にぴったり」と言うんですよ。「カードを作る？」と聞いたら、「カードも作ってほしい」と。それ以来あのカードが存在しています。



蝦：子どもたちはうれしいですね。

駒崎：カードにある言葉を使ってもいいし、ない言葉でもいいよと言っています。すると子どもたちはカードにしてほしいから、いっぱい考えます。

蝦：言葉に詰まったときのヒント探しにもなりますし、自分たちの言葉ですものね。ところで、『アイネ クライネ〜』や『双頭のわし〜』で感想文を書かせることはありますか？

駒崎：ほとんどありません。以前は紹介文を書くこともありましたが、今は「おすすめポイント」を書くことにしています。感想文を書く機会は年に1回あ

るかないかぐらいですが、今後はまたあらためて捉え直してみようとも考えています。

認め合い

蝦：先生と子どもたちとのコミュニケーションがすばらしいと思いました。カーテンを閉めたり、ボードの移動を手伝ったり…かゆいところに手が届くというか(笑)。また、発言している友達を見ている子どもたちの姿が印象的でした。子どもどうしの学び合いにつ

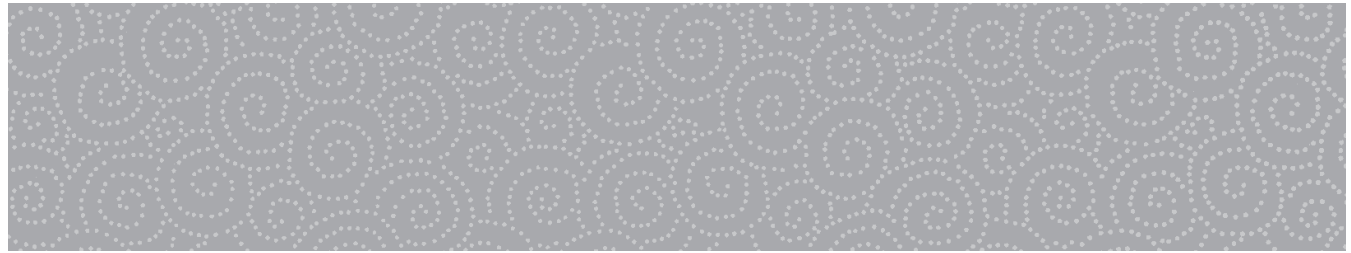
いては、学校全体での取り組みなのでしょうか？

駒崎：誰が話しているの？と声をかけるようにしています。私が、「子どもが子どもを育てる姿」が好きなことに関係しているのかもしれませんが。子どもが子どもに言うのと相乗効果で伸びますよね。

蝦：表現と鑑賞の関連を図る活動はどのようになさっていますか？

駒崎：本時は『リボンのおどり』からのつながりで、鑑賞の際に「パート」という言葉が出てきたことがあります。歌唱に生かす場合には『白鳥』のまったり





感が何かの歌に似ているという発言が出てきました。子どもたちは『白鳥』のピアノの伴奏ならメロディーは歌でもいいんだと思うようで、「ターラーターラー」と歌いだしたので「そうだね、歌ったら楽しいかもね」というつながりも生まれました。子どもにとって『白鳥』はハープの伴奏よりもピアノ伴奏の方がしっくりするようです。ピアノの伴奏は歌で慣れ親しんでいるからでしょうが、そういうことも表現からのつながりと考えられます。

一人一人の見取り

蝦：今日の授業では、どのような評価をなさるのですか？

駒崎：本時でも記入した「鑑賞カード」の内容での評価に加え、発言内容、最後

にDVDを観ているときの評価(表情観察)です。どんな表情で観ているのか…指揮をしながら、また拍に合わせて手や身体を動かす子もいました。でも表に出さない子もいますよね。それをどう読み取るかですが…。板書をしているとき自分は後ろを向いてしまっているの、発言した子と「同じ」とうなずいている子を見逃してしまっているかもしれません。ただし鑑賞も1曲だけで評価はしません。必ず個票(個人カルテ)を作って一人ずつ見取るようにしていますし、そこに支援内容も書いています。

蝦：支援内容に「賞賛」と書き込んでいらっしゃるんですよね。

駒崎：「すごいね」というほめ方もありますが、「そうだね」と共感してうなづくだけでもいいと思っています。

蝦：「鑑賞カード」を書いているときに、

先生は一人一人よく見ていらっしゃいましたね。

駒崎：「そうだね」と一声言葉をかけるだけでも、その子は「先生に認めてもらえた」と安心して書けますよね。また確認してあげないと前に進めない子もいるので…。

蝦：「これはどういうことなの?」「なにを書きたいの?」という声かけですか？

駒崎：そうです。あと間違ったところに書いてしまう子もいるので注意します。

蝦：個票は毎時間作られているのでしょうか？

駒崎：それはできませんので、ここはというときに作ります。継続して見取っていく材料になりますし、評価にも生かします。



授業者に 訊く— 2

上尾市立太平中学校は、学校中あちらこちらに「合唱」の文字が見られます。

音楽室に体操着で現れた3年生の生徒たちは、楽しそうに発声練習をし、元気いっぱいのびやかに声を響かせていました。



授業者：都木雅之（上尾市立太平中学校）

本時の授業の位置付け

今回の授業は、11月に校内で行う合唱祭に向けた活動の1時間目です。本時では、今年度のNHK全国学校音楽コンクールの課題曲である『友～旅立ちの時～』に取り組みます。これは学年合唱の扱いとしました。作曲者であるゆずが、どのような想いを込めてつくったのかを考えることで、この曲をどんどん好きになってもらい、表現活動への意欲につなげたいと考えています。また学年合唱を創り上げていく過程で協力することの大切さや、学年への帰属意識を高めていくこともこの活動を通して学ばせたい部分です。



長谷川 隆 先生
上尾市立太平中学校校長

授業の流れ

	○学習の内容 ・学習活動	●教師の関わり
導入	○発声練習 ・肩たたき ・マッサージ ・プレストレーニング ・ロングトーン ・『校歌』を歌う。 ・『夢の世界を』を歌う。 ・ハーモニー練習	●音楽をする(演奏をする)ための体づくり、雰囲気づくり。これから音楽の授業が始まることを意識させる。 ●息を吐くことを意識させ、響きを追求させる。 ●ハーモニーをつくり、耳をよく使いながら合わせることを身につけさせる。
展開	○『友～旅立ちの時～』の音取りを行う。 ・歌詞を読む。 ・歌詞中のスタートを予感させる部分を発表する。 ・ゆずが歌詞に込めた想いを知る。 ・音取りを行う。 (ソプラノ→アルト→男声)	●気に入ったところを意識させ、興味をもたせる。 ●この曲のテーマにつながるキーワードを探すことで、歌詞中の訴えたい部分を共有させる。 ●NHKで放映された番組を鑑賞し、ゆずの想いを共有させる。 ●待っている生徒は、自分のパートに線を引き、自分がどこを歌うのかを把握させる。
まとめ	○音取りが終わったところまで、パートごとに輪になって合わせてみる。 ○アピールシートの記入をする。	●今回どのくらい音取りができたのかを把握させる。 ●今回の授業でがんばったところを振り返らせる。

「歌いたい！」を大切に

聞き手：工藤豊太（東京音楽大学准教授）

音楽の授業は体育?!

工藤：生徒たちが体育着で音楽室に入ってきたので、今日は体育の後だったのかしらと思ったのですが、授業が進むうちに体育着で来た意味が分かりました。ストレッチを取り入れるなどかなり丁寧な導入でしたが、これは先生が考案されたものでしょうか？

都木：その前の授業…国語や社会を終えて、生徒はいろいろな状況で音楽室に来ます。気分をぱっと音楽に切り替えるためにも…騒いでしまっても大目にみて、歌を歌うんだという気持ちにするために、毎回必ず体全体を使った発声練習をします。体全部が楽器だということを覚えさせたい意味もあります。1年生の最初の授業では「音楽は体育だと思ってください」と言うんですよ(笑)。だから、制服ではなく体育着で授業に来ているのです。



○たかき・まさゆき
上尾市立太平中学校教諭

工藤：なるほど。生徒たちのテンションが高くてよいと思いました。

都木：体で表現することも評価するよと言っています。静かに座っているから3がもらえるものではないと。1年生にはそういう言い方はしませんが、体を使って歌を歌う…基礎訓練のよう

なものだと思います。結果として、年間指導計画どおりに進まず、1年生では歌唱が多くなってしまいうちもありますが、ここはどうしても徹底したいところですよ。

歌うときは違う自分になる

工藤：裏声を使った瞬間、声の質が変わりました。これはねらいどおりのことですか？

都木：授業中、特に3年生には「歌うときは違う自分になっていいんだよ。それっておもしろくない？」としかけています。男子は「私のお墓の前で～」とすぐに歌うので、「あの人の声をまねてごらん。その声でちょっと歌ってみようよ」と言うとパッと声が変わるのです。「発声とはこうである！」と講義を始めてしまうと、生徒たちはシャッターを閉じてしまうので、体験させながらです。

工藤：なるほど。『夢の世界を』の「さあでかけよう」では、とたんに歌い方が変化しました。あえてねらった歌わせ方なんですね。

都木：「さあ～」のように出しやすい音域で響きを確認できるので、『夢の世界を』はいい教材です。この曲は2年生の教科書に載っていますが、全学年で歌えるようにして、学年ごとにこちらで到達点を設定します。全校合唱や合唱祭でみんなが歌える曲のレパートリーにしています。

週間たっても忘れないように

工藤：今日の授業のメインである『友

～旅立ちの時～』の指導を拝見しましたが、もっと音取りや歌唱をたくさんさせるのかと思いました。

都木：歌詞を読むのにここまで時間を取ったのは初めてでしたが、ちょうどよいNHKの番組もあったので、見せました。

工藤：本来ならば、もっと「歌」と「語る」バランスをとった方がよいと思うところですが、今日はそんな印象を受けませんでした。例えば先生がパートごとに音取りをしている間に、その他の生徒は自分のパートに線を引いていましたよね。そのとき生徒は、歌を口ずさんでいました。自分が歌っていないときでも、彼らはそこで歌っていたんです。

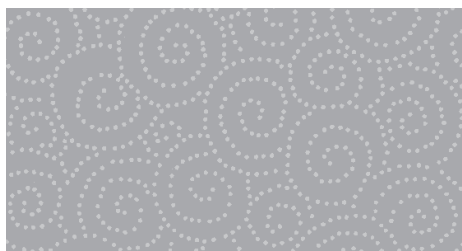
都木：そこで音楽活動をしている空気があったのですね。

工藤：ただ声を出しているだけではなく、日頃から先生が生徒たちの心を耕していっていったことが分かりました。

都木：歌詞を読ませると、他のクラスでも「この歌詞好き」「ここが好き」という意見がポンポン出てきました。いつもだと早く音取りをしないと時間に追われてしまうのですが、導入として歌詞をしっかりと読む活動をするのもいいな、と思いました。



○くどう・とよた
東京音楽大学准教授



工藤：先生が音取りをしている間、男子は少しくだけているところもありましたが、彼らが同じ音楽を感じて活動しているのがよかったのではないのでしょうか。よく、こちらで音取りをしていて、違うパートは別世界ということが起こりますよね。

都木：そういうクラスもあります(笑)。でもその場合にも、今日のような進め方がよいのかもしれませんね。

工藤：生徒たちが「早く歌わせてよ!」という感じを受けました。そういう気持ちにさせるために、ゆずの映像を流したり、アルトの音はスピーカーで流したり、いろいろなものを駆使なさっていました。

都木：指導力がいたらないところなのですが、「どこか別の部屋でパート練習をしておいで」というのが難しいので、音楽室でなんとかしようとして試行錯誤しています。音を取って合わせないと生徒はよく分からないと思いますし、1週間たつと忘れてしまいます。どういう雰囲気かをちゃんと感じ取らせないと、残らないと思うのです。ですから少しでも最後に輪になって合わせるようにしています。

〔共通事項〕の生かし方

工藤：合唱祭に向けて、これから表現や曲の要素について深めていくことになると思いますが、テクスチュアを含めて黑板に〔共通事項〕のカードを貼っていらっしゃいました。

都木：今日はまったく使いませんでした(笑)。

工藤：ふだんから、あれを意識していらっしゃるのかな、これからカードを



使って授業を進めるのかなと思ったのですが、いかがですか？

都木：いちばんよく使うのは鑑賞の授業です。リズムはどうだったか、強弱はどうだったか、音色は、旋律はどんな感じだったかと確かめながら、貼っていきます。それを合唱の授業に生かすこともできます。

工藤：それが本来の〔共通事項〕の重要な目標の一つですね。

都木：合唱で黑板を使うことはそうありませんが、録音して自分たちの声を聴くときに「強弱をよく聴いてごらん」と使うことはあります。

工藤：表現においても、鑑賞で学習した強弱や響きの重なりを意識させるということですね。

都木：はい。理想としては鑑賞で学んだことを歌唱にも生かしたいのですが、指導案どおりにいかない場合も多く、道徳的な内容が中心になることもあります。

どうすれば歌ってくれるのか

工藤：先生は「今の顔いいね!」などと生徒のよさを見ながら、励ましの声かけを多くなさっていました。

都木：なるべく否定的な注意をしないようにしています。ほめておいて、そうでない生徒をそちらへもっていこうという意識があります。

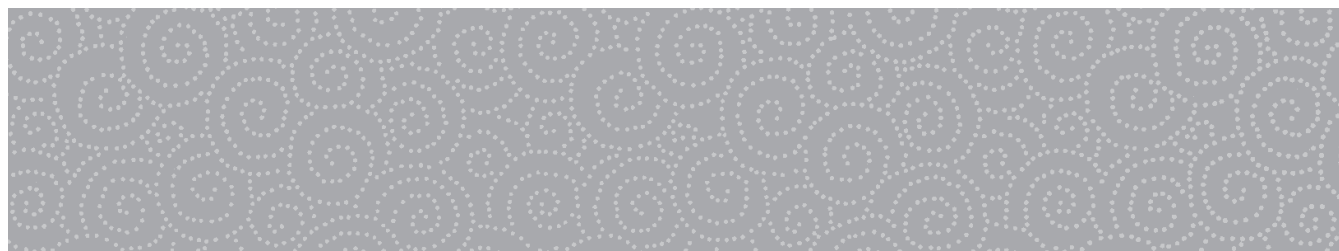
工藤：「この年にゆずのこの曲を歌う、これが出会いという一つの運命だよ」とおっしゃいましたね。もうこれで生徒の心はガッチリつかまれていましたし、すぐに生徒が「先生、運命？タタターン!」と返していました。

都木：覚えていてくれたんだ、とうれしく思いました。ああいう素直な反応はおもしろいですよね。

工藤：生徒の心を浮き立たせる声かけがみごとでした。

都木：この学校に来て、「どう指導すれば歌ってくれるだろう」とたくさん考え、悩みました。歌うことになぜこんなに抵抗があるのか…きつい指導をしてもそれは変わらないし、むしろ悪くなってしまう。「歌わなければいけない」ではなく、「歌いたい」という気持ちにしたい。一つの契機となったのは山崎朋子さんの『大切なもの』でした。この曲を教え始めたとき生徒の反応がよかったので、先生に直接お電話をしたんです。どうしてこういう曲を書いたのか教えてくださって。

工藤：そうですか！



都木：はい、詳しくファックスで教えてくださいました。生徒たちは、曲の裏側に、いろいろな人の想いがあるということを考えるきっかけがなかったのだと思います。この曲はこうやって生まれた、こういう想いが込められているということを考えさせることで、彼らの歌いたい気持ちを広げるきっかけになると考えました。

工藤：学習指導要領の解説には「イメージ」という言葉が入っていますよね。自分の想いや曲のよさ、こうやって歌いたいという意欲をもちなさいよ、イメージをふくらませなさいよというように。先生がなさっていることは、そのための材料ですね。

都木：はい。感想などを読んでみると、彼らはいろいろイメージしているんです。でもそれをうまく文章で表せなかったり、声で表現できなかったりするだけなのです。

課題「わたしにとって音楽とは」

工藤：年間を通して、どのような音楽活動をなさっていますか？

都木：1学期は歌唱が中心です。進級して新しいクラスになるので、クラスの声づくりをします。その他に鑑賞と、3年生はアルトリコーダーも扱います。2学期に入ると合唱祭、終わってからは鑑賞と、1・2年生はアルトリコーダーを行います。3学期は教科書にある『テキーラ』を使って、リズム遊びをしながら創作をします。3年生には「わたしにとって音楽とは」という課題で冬休みに文章を書かせますが、楽しそうに書いてきます。1年生は民族音楽、2年生は作曲家についての調べものを課題にします。3年生には「人生最後の音楽の授業かもしれないよ」という話もしています。

工藤：それは素晴らしいですね。ところ

で和楽器は？

都木：箏があるので、1年生の3学期にゲストティーチャーを招いて演奏会もします。音楽といっても範囲が広いので、すべてをこなすのは大変ですが、今後の目標は創作です！

工藤：時間の多少にかかわらずさまざまな領域を教えることで、生徒がどうい音楽と接点をもつのか。われわれの仕事はその接点をつくることだと思います。その苗をもって生徒は歩いて行き、将来育てていけばいいのしょうから。

都木：そうですね。

工藤：それから今日感じたことですが、導入の発声練習やストレッチで先生が弾かれたピアノのヴァリエーションが素晴らしい。活動全体がとても音楽的でした。それから導入のときはかなりにぎやかだったのに、VTRを見始めたとたん、生徒たちはまるで人が変わったかのように静かになりましたね。態度の切り替えがすごいなあと思いました。

都木：3年生になると、大事なところでは静かになりますね。

学校全体で取り組む合唱

工藤：校舎内に掲示してある「一唱入魂」というスローガンが気になりました。

都木：今年のスローガンで、生徒会が考えたものです。去年、市の委嘱研究として「全校合唱の可能性」を探りました。感動体験をもつことや学校への愛校心を育てることで、学力やいろんな意欲が向上するのではないかという仮説を立て、2年間取り組みました。それらを通して、合唱が学校の一部になってきてい



る感じがします。生徒会でつくった「レインボープラン」というのがあるので…。

工藤：(壁面のポスターを指して)あの7つの目標ですね？

都木：あいさつ、学習、称賛、部活動、花、掃除、「合唱」なんです。

工藤：合唱が入っているんですね！都木先生がお一人で「合唱をやりたい」とおっしゃっているわけではなく…。

都木：全然違います！むしろ、赴任当初に「全校合唱をやってみたいんだけど」とまわりから言われて、他教科の先生からそんなことを提案されるなんて、とびっくりしました。そんな機会はなかなかないですし、週1回の授業では難しい取り組みですよ。最初は生徒の雰囲気も今と違って難しいところもありましたが、学年ごとに校歌の練習から、試行錯誤をしながら進めてきました。

工藤：中学校では数・英・理などの教科時間が重視されて、音楽や美術などの芸術系は時間が削減される傾向にあります。その中で音楽科がどのように学校に根を張るか、一つの重要なポイントだと思いました。中学校で月に1回でも全校合唱をするというのは素晴らしいことです。

都木：小学校では音楽集会などがありますが、上尾市では年間を通して全校合唱するという取り組みはなかったので、先生方も新鮮に感じるらしく、楽しみにしてくださっているようです。

最後の授業は卒業式

工藤：「中学校の音楽教育がこうなればいいな」という夢はありますか？

都木：夢！そんな質問をいただくとは！



うーん…、自分の音楽科の最後の授業は卒業式だと思っています。卒業式で歌う生徒の姿が、ある意味自分への評価だと。最後に私の指揮で校歌を歌うのですが、そのときの顔は…自分は仕事なのであたりまえのように見えています。他の先生方は見ることができないものです。こんなにすばらしい機会をもらえる教科っていいな！と思っています。自分に対する生徒の表情が自分への通知表。こちらをどれだけ見てくれるか。あの姿をいつまでも大切にできる教師でいたいと思います。

工藤：すてきなお話ですね。

都木：音楽の可能性について、音楽は世界の共通語だと思いますし、そういう話をよく生徒にします。このことを大事に、生徒と触れ合っていきたいです。合唱祭でうまく歌うことが目標なのではなく、最後にどういう歌を歌ってこの学校を卒業するかが大事なんだと話しています。

工藤：中学校は学校に音楽の教師は1人、しかも先生は学年主任をなさっているとのことですが、音楽の教師と他教科の先生との連携について、心を砕かれていることはありますか？

都木：一人では合唱づくりはできないと思っていることでしょうか。そのようにことあるごとに他の先生にもお伝えしていますし、生徒がこれだけ歌えるのは、ほんとうに先生方のおかげだと思っています。私の見えないところで、先生方がご指導くださっていると、先生方がご指導くださっていると、そういう気持ちで全校の合唱づくりに取り組んでいます。

工藤：さきほども話が出ましたが、生徒会がガチッと下支えをしていて、先生方もスクラムを組んで後押しをしてくださったうえに、必要なところで都木先生の楔がぐっと入るというのは、中学校の学校行事と音楽の教師との理想的なかかわり合いかただと思いました。

都木：本当にありがたいことです。

特集

〔共通事項〕で 音楽科の授業は どう変わったか？



今回の座談会では、新学習指導要領から〔共通事項〕を取り上げました。
〔共通事項〕を指導計画、授業展開に位置付けて扱うことで、授業での変化はあったのか？—ご参加の先生方から、ご自身の授業実践においてどのような意味・意義があるのかなど、熱のこもったお話が繰り広げられました。総括は毎回恒例の小原光一先生。読者の皆様と座談会の内容を共有することができれば幸いです。

参加者

小松康裕先生(台東区立上野中学校)
青嶋美保先生(府中市立府中第九小学校)
佐々木 睦先生(世田谷区立希望丘小学校)
小作典子先生(杉並区立荻窪中学校)
古賀めぐみ先生(板橋区立板橋第一中学校)
小原光一先生

●〔共通事項〕の意味をどうとらえるか

小松：新しい学習指導要領の全面実施から、小学校2年、中学校1年が過ぎました。以前の学習指導要領にも指導内容として位置付けられていましたが、今回新設といいますか、取り出した形で〔共通事項〕が示されました。今回改訂の中心でもあった〔共通事項〕の新設が授業改善にどのような意味・意義をもったのか、皆さんの実践に基づくお話をお聞かせください。

佐々木：音楽づくりと〔共通事項〕が、新学習指導要領の軸になっていると思います。音楽づくりはすごく大変ですが、子どもがこうしたい！と思って取り組めるものです。担任の先生の中には、音楽科は行事のための音楽を仕上げる教科だと思っていらっしゃる方もいますので、演奏の出来・不出来で評価されてしまいがちですが、音楽も教科なので学力を付けなければいけない。ではどういう力を付けるのか？〔共通事項〕はそれを内外に知らせる「学力を可視化する」という意味があるのではないかと考えます。

青嶋：今までも当然、必要に応じて〔共通事項〕の内容を指導してきましたが、今回の改訂でより意識するようになったのは確かです。教材を見たときにまず、〔共通事項〕と結び付けて何を指導するかということを考えるようになりましたし、目当てがはっきりするので評価がしやすくなりました。市内の先生方からも、これまでは評価が難しかった鑑賞で〔共通事項〕をよりどころとし、どこに着目するのか子どもに伝えやすくなり、評価がしやすくなったと聞きます。

古賀：今回の座談会を機に〔共通事項〕について考えてみたところ、自分が授業で「共通言語をもつ」ということを意識していることに気がしました。授業を展開する上で共通言語がないと、生徒に何か伝えたいことがあってもうまく伝わりません。例えば合唱のときに「練習番号をふるよ」と言ったときに、その言葉だけでも「何だろう？」となってしまいます。実は、〔共通事項〕とは音楽の授業の上での共通言語だと思います。〔共通事項〕によってそこに注目して授業を組み立てることができるようになりました。音楽のベースになるもの＝〔共通事項〕だと思います。また吹奏楽部の生徒にも同じ言葉で説明をし、「授業で習ったよね」と言うと分かってもらえるようになりました。

小作：数年前までは、合唱コンクールなどで曲を仕上げるとき、「ここはこういうバランスで盛り上げよう」と教師が言ったとおりに表現させる、技能を習得させるというような実践が多かったように思います。でも新学習指導要領になってからは、なぜそう感じるのか、など生徒たちに問いかけることが多くなりました。生徒たちの感性を働かせることが大切だと解釈しています。

小松：私自身は、若い頃やっていた実践がやっと日の目をみたか！という気持ちでした。これが音楽の学力だと自信をもって指導していいんだな、という印象です。



○こまつ・やすひろ
台東区立上野中学校校長

佐々木：こういう気持ちを歌いたい！と思ったときに、「〔共通事項〕の中のどれが変わったかな？」「少しゆっくり歌ったよ」「やさしく小さな声で歌ってみたよ」と、自然に〔共通事項〕に結び付く言葉も出てきます。

青嶋：〔共通事項〕を通して子どもたちは思いを共有することができるようになりました。子どもたちは *f* や *p* など覚えた用語を逆に使いたがる場面も見られます。むしろ危惧しているのは、言葉だけがひとり歩きをしてしまうことです。指導者側もその言葉が出てくることを期待して、そこへ誘導する発問をしがちなきががあります。でも子どもたちの感受はとてもしなやかで、子どもならではの言葉で感じることもあるのです。初めから〔共通事項〕を引き出そうとすると、子どもたちも抵抗を感じて発言も少なくなるということがある

と思います。ですから、まずは子どもたちとの自然なやりとりを大事にしなければいけない、と意識しています。

●「歌唱」で〔共通事項〕を意識することによって、子どもや教師はどう変わったか？

小松：小学校と中学校では授業形態も違うと思いますが、まず歌唱表現の授業に関してはどのような変化があったのでしょうか？

小作：中学校では、大きく2つ変わったと思います。1つは曲想を感じ取るとき。どうして作曲家はここを f にしたのかを考えたり、この旋律の高まりにどんな思いが込められているのかを感じ取り、生徒たちに言葉で表現させて、じゃあそれをイメージしてもう一度歌ってみよう、という展開に変わりました。もう1つは声部の役割について考えるとき。ただハーモニーを演奏するのではなく、かけ合いなのか、ハーモニーなのか、ユニゾンなのかを考える。ハーモニーのもっている雰囲気や味わいを感じ取って「いいな」と思うだけではなく、ここはこんな関わり方をしているんだ、他のパートとこんなふうに関わろう、と他の人ともコミュニケーションをとって、キャッチボールをしながら演奏していくようになりました。



〇おざく・のりこ
杉並区立荻窪中学校主幹教諭

古賀：例えば混声三部で合唱する場合、各パートの役割について、自分たちで気付く場合と、こちらが指導する場合があります。生徒たちの言葉で

パート練習が発展することもありますし、事前に「ここは飾りの旋律」「ここは和音をつくっているよ」「ここはこっちが主旋律」と学習しておく、パート練習中に「じゃあここは飾りの旋律だからおさえ気味に歌おう」などと用いられている場面もあります。みんなが共有できる、全国の子どもが同じ言葉を知っているということが大きいのではないのでしょうか。共通の言葉があることで、教師と生徒、生徒どうしでのやりとりや学び合いが多くなったと実感します。

佐々木：「音の重なり」では、対位法的な重なりと和声的な重なりの違いについて、追いかけるときは互いの声を聴き合いながら歌いましょう、和声をつくるときはバランスに気を付けて音色を溶け合わせましょうなどというように、〔共通事項〕にからめた助言を自信をもってできるようになりました。正しい音程で歌えているか、きれいな声が出ているかからもう一步踏み込んで、子どもたち自身で工夫できるようになっています。「和声の響き」についての題材は技能や理論にとらわれ過ぎてしまい、まだ指導が難しい部分もありますが、ハモると気持ちがいい、すてきだなという、和音や和声のよさに触れる一つのきっかけになりました。

青嶋：小学校では歌詞をととても大切にします。歌詞の意味が分からなければ自分たちの歌にはならないので、歌詞を味わうことが大切になります。歌詞の意味がわかって、自分たちの体験を通して「こんなふうに思いを込めて歌いたい」とか、「こんなことを表現したいからここはクレシェンドになっているんだね」という振り返りをしながら、自分たちで歌い方を工夫するというように、おそらくどの学校も意識が変わってきていると思います。同じ曲でもメンバーが違っていると伝わるものが違う。子どもたちも歌わされているのではなく、自分たちがどう歌いたいかを工夫して、「自分たちの歌」として歌うという意識をもつようになりました。

佐々木：作曲家目線になって教材研究(アナリゼ)をすることがすごく大事だなと思います。「こう書いてあるからこう歌いましょう」ではなく、「こう歌ってほしいからこう書いてある」と考えると、子どもの思いも生かされてくるのではないのでしょうか。

●〔共通事項〕の要素が ひとり歩きすることは？

小松：中学校の教科書の目次には、学習の窓口として各楽曲でどの要素を学習するのが示されていますが、要素だけが先行してしまうことはありませんか？

小作：都中音研などの研究会では「〔共通事項〕を教えるために授業があるわけではなく、音楽活動の中で〔共通事項〕が関わってくればよい」のであって「〔共通事項〕を学ばせる授業ではいけない」と重ねて言われました。「〔共通事項〕を考えさせたことで歌う回数が2回減ってしまった…ということにならないよう、バランスを考えるようにしています。

青嶋：なぜスタッカートや *f* が付いているのか、そこにはどんな思いがあるのかに目を向けないと、子どもは〔共通事項〕の言葉だけを口に出してしまいます。〔共通事項〕の要素が曲の魅力にどうつながっているのかにも着目させたいところです。〔共通事項〕を教えるのではなく、〔共通事項〕を通して豊かなことにつなげられるかを心掛けるようにしています。

●「知覚・感受」で聴き方が変わったか？

小松：「鑑賞」の授業で変わったことや、意識的に変えたこと、変わったことはありますか？

古賀：例えば声の「音色」ですね。生徒はほんとうに『魔王』が好きなようで、驚くほど真剣に聴いています。役柄ごとの声の音色に注目して聴かせると、批評文にはいろいろな言葉でたくさん書いてくれます。また、「ピアノの3連符のリズムを変えてみたらどうだろう？」など、〔共通事項〕によっていろいろな見方ができます。教科書には〔共通事項〕の要素が抜き出されていますが、実際の音楽にはすべての〔共通事項〕が含まれていますよね。だから、何でも取り出せる。何をピックアップするのかという視点で鑑賞をするようになりました。

小松：「知覚」と「感受」の順序性を気にする先生がいらっしゃると思いますが、それはどちらでもかまわないと思います。繰り返して身に付けていけばよい力なのですから。どうしてそう感じたのかは、後から考えてもいいと思います。鑑賞の授業で

は、自分なりに曲を価値付けて批評した感想文などが多く取り入れられているので、知覚・感受がとても見取りやすいですね。そこで、子どもたちの聴き方は深まりましたか？

小作：若い頃は、映像を見せるのが鑑賞だと思って授業をしていました。オーケストラの演奏だったら、音と映像の両方を流して進めていく。でも今は、音だけを聴かせて…それも抜粋した一部分だけをよく聴かせるという展開が増えました。『ブルタバ』でしたら、最初の物悲しい主題と、後半の転調して速度もあがった主題を聴き比べたりします。音でどんなふうに表現されているか、どうしてこう聴こえるのか、イメージや標題に近づいていくことに時間をかけます。そうすると、そういった内容で批評文を書く子がどんどん増えてきて、「私が何を意識してどんな授業をするか」によって、批評文もすぐ変わってくるということに気が付きました。

小松：〔共通事項〕を意識するあまり、教師が指導する方向に感想文や批評文の内容が向いてしまうのは、少し怖いと思いますが…。

佐々木：子どもの自然な気付きや感じたことがベースにあって、そこから言葉を引き上げていくようにしないとイケませんね。「気づく⇒感じ取る⇒工夫する」の流れに必ずしも沿わなくてもいいのでは、と最近思うようになりました。



○ささき・まこと
世田谷区立希望丘小学校主任教諭

小松：先生が「これはここがいいんだよ」と限定的に言うと、子どもはそれでなければいけないと

思ってしまうからです。

青嶋：子どもはすなおなので、くみ取りすぎてしまうんですね。先生は何を期待しているんだろうって。



○あおしま・みほ
府中市立府中第九小学校主任教諭

小松：昔みられたような「この曲は暗かった」「明るい曲だった」という感想文から「なぜ」が書けるようになってきているのでしょうか？

佐々木：4年生の教科書では『ソーラン節』と『南部牛追い歌』を比較聴取する題材があります。ここでのポイントは「拍」で、拍のある民謡と拍のない民謡の比較をします。1年生から継続して身に付けさせたい要素のひとつである「拍感」ですが、「拍がない音楽もあるんだ」と気付いたときの子どもたちの驚き！〔共通事項〕が入ってここに注目させればいんだな、という鑑賞の授業展開への手がかりができたように思います。

青嶋：小学校では最後に整理をすることが大事です。そうすることで、漠然としていたものがクリアになる子どももいます。子どもたちは聴き取ったこと（知覚）と感じ取ったこと（感受）の2つを区別することがなかなか難しいので、発言や感想からいっしょに整理します。小学校では表現と鑑賞の一体化が重要ですから、まず表現教材では何を学ばせたいのか、鑑賞教材ではどこに着目させるのかということを絞るときがあります。感想文はテーマに注目して書けているかどうかを見ます。

●表現と鑑賞の関連は、小・中でどう違う？

小松：表現と鑑賞の一体化というのは、例えば歌唱でこういう要素に気付かせたいときは、そういう要素をもった曲を聴かせるということですか？

青嶋：はい。こんな変化を求めたいなと思ったら、それに合った鑑賞教材を選びます。

佐々木：中学校でもそうしているものだと思っていました！題材があって、そのねらいに沿った歌唱と鑑賞教材があるものかと…。

古賀：1時間の授業で鑑賞という展開が多いので、さらっと扱うというよりも、時間をかけています。

小作：中学校では、1学期全体が1つの題材構成になっているように思います。50分の中で歌唱と鑑賞を盛り込むよりは、前の授業で扱った歌唱と次の鑑賞の授業の内容がリンクするように、年間指導計画を立てます。

●「音楽づくり・創作」と〔共通事項〕

小松：音楽づくり・創作と〔共通事項〕の関連はどうですか？

青嶋：自分が好きだということもありますが、〔共通事項〕がいちばん扱いやすいのは、音楽づくりだと思います。例えば低学年では、ちょっとしたアイデアでできる音楽づくりをします。先日は『かえるのがっしょう』を使って、音楽づくりをしました。「どんなカエルが出てくるかな？」「お父さんガエル」「どんな音？」ときくと、「低くてゆっくり」「重々しい音」などが出てくる。他にも赤ちゃんガエルの高くて小さな音、慌てん坊ガエルのテンポが速くなる音、スキップガエルのタッカタッカのリズムが出てくる音など…。そのうちに、「追いかけてっこをしたい」と言い出しました。そうすると、もうたくさんの要素が入りますよね。強弱、音色の変化、違うリズムの重なり…。結局グループごとに発表会をすることになり、演奏に自分たちで考えたお話やカエルの鳴き声も入れる…これでもう1つの曲が構成されます。「カエルの変身発表会」として、2年生でもたくさんのことができました。歌唱のカノンから音楽づくりのカノンにもつながられました。

小作：つい先日、自分で歌詞をつくり、旋律創作をする授業をしました。「受験勉強いやだな」という歌詞の子や「部活、ラストの大会までがんば

るぞ!」というような歌詞の子もいます。そこから、「こういう思いだからこの調を使おう」とか、「そこにこの記号を付けてみよう」と考えます。つくった曲を歌で表現するのが難しかったら、どんな楽器で表現すれば雰囲気合っているかを考えます。〔共通事項〕は、自分のイメージと音楽を結び付ける役割をしていると思います。

●扱いづらい〔共通事項〕は？

小松：〔共通事項〕で扱いづらい要素はありますか？例えば、小学校では「音楽の縦と横の関係」が難しいという声も聞こえてきますが、どうでしょう？

佐々木：扱いづらさはあるんですが、旋律の重なりとしてとらえるか、和声としてとらえるか、にもよると思います。ともすると理屈っぽくなってしまいますから、分析的になりすぎて、まるごと音楽を楽しむところから離れてしまうんですね。

小松：それらを総括して「テクスチュア」になるかと思いますが、どうですか？

小作：確かに、テクスチュアはどうなっていますか？という質問だと難しいかもしれませんが、「テクスチュア＝関わり合い」と教えているので、生徒は理解できるようになっています。フラッシュカードも作りますし教科書にも出てきますが、そのままの言葉では使いませんね。音色や楽器の重なりを勉強していくと、自然と生徒たちはテクスチュアについて知覚・感受することになるので、「そうだね、関わっていたね」と言って、テクスチュアにつなげていくことはあります。

青嶋：小学校ではまだ「感覚的に分かる」の段階のように思います。それから調を教えるのも難しいです。ハ長調とイ短調を教えますが、調性の「感じ」がつかめればいいかなと思っています。

佐々木：「今月の歌」などの常時活動において、何の予告もなく半音高く移調して弾いて歌わせたりします。「いつもと違うのわかった？」と気付きをうながしたりします。「調性格論」に少し触れさせるきっかけになりますね。

青嶋：そうですね。さきほどの『かえるの がっしょう』でも、しょんぼりガエルで短調の少し暗い感じというような扱いでしょうか。

小松：中学校もそういった小学校での現状を知らなければいけないですね。

●今後の課題

小松：今後の課題を教えてください。

小作：表現する時間と鑑賞する時間、音が空間に響いている時間を減らさないようにしたいということ。でも表現ばかりだと〔共通事項〕とのからみを説明する時間がとれない…そのバランスが大切です。

小松：実際の音楽活動の分量ですね。

小作：それから小学校で「音楽って楽しい」と思っていたのに、中学校では深めているつもりが「理屈っぽい、難しい!」と感じてしまうこと。「楽しい、おもしろい」と感じる気持ちから「深いな、そういう捉え方もあるのか」と興味をもてるように〔共通事項〕を使えばいいなと思います。また、中学校では評価や評定がからんでしまうので、どうしてもグループ活動が減ってしまいます。創作でグループ活動がしたくても、グループの中のできる子がリードしてしまうと、一人一人の見取りが難しくなるので、授業展開の方法が課題かなと思います。

古賀：音楽はコミュニケーションツールだと思っているので、人との会話のように音楽でも会話をしていくことが大事だと思います。一方的に何かを教えるのではなく、一緒に演奏する、活動する、会話をすることが大切ではないでしょうか。短い時間でいかにそれを実行していくか、そのために1年間を見通し、3年間を見通し、また小学校の先生とも連携して、バランスよく授業を組み立て



〇こが・めぐみ
板橋区立板橋第一中学校主任教諭

ていきたいと思います。

青嶋：まず楽しくあってほしいし、音楽を好きであってほしい。それが一番の願いです。関わりが苦手で、言葉でうまく関われないがためにいろいろなトラブルや孤独を抱えている子どもがたくさんいます。学校でも家庭でも寂しさを感じている子たちが音楽室に来たときに、音楽の魔法の力で…と私は言っていますが、「音楽を通してつながれた！」という時間にしていきたいと思います。〔共通事項〕って気を張らなくても、自然に子どもたちのアイディアや発言から出てくるものです。私たちがアンテナを高くして、子どもたちの発言をキャッチしながら全体で共有したいなと思います。

佐々木：授業で教えたことが、音楽室を出たときに、つまり合唱コンクールや部活、課外活動などで生かされることが大切だと思います。中学校・高校では、生徒だけで音楽をつくり上げていく場面が多くなるので、そのためのアイテムとして〔共通事項〕は重要だし、〔共通事項〕を一つの軸として、9年間を見通した授業計画が必要となってくると思います。音楽は目に見えるよさに加えて、言葉にできないよさが必ずあります。声が美しいだとか迫力があるだとか以外に、感動のあま

り言葉になりません、という部分。感動していきいきと目を輝かせている子どもたちの姿を大切に、そこから〔共通事項〕に結び付けていく指導をしたいと思います。

小松：新学習指導要領が定着してきたところで、小中の成果と課題の共有を図る意味からも有意義な意見交換をすることができたと思います。ありがとうございました。



〈音楽力〉の高まりを願って

小原光一（前横浜国立大学教授）



過日、小中学校の先生がそれぞれお2人ずつ集まり、上野中学校校長の小松康裕先生を進行役として行われた座談会にオブザーバーとして同席させていただきました。

中心的な話題は、現行の学習指導要領に示された〔共通事項〕をめぐってのことであり、日頃の実践を基に活発な意見が交わされました。

座談会は4人の先生方がそれぞれ自己紹介を兼ねて当面の思いを語られることから始まりました。聞くうちに、平素信念に従ってすばらしい指導をされている方々ばかりなのだということを強く感じ、大変頼もしく思いました。果たせるかなその後ものを射た切れのよい発言が相次ぎ、終始充実した流れの中で時の経つのを忘れる程でありました。快適なテンポで進んでいった話し合いの中から、私なりに思ったことを述べてみることにします。

まず冒頭で小松先生が「今回新設といいますか、取り出した形で〔共通事項〕が示されました」と話されました。〔共通事項〕は突如現れたニューフェイスではないことを、先ずもってしっかり認識して受け止めることが大事だと私も思っています。というのもこれは長い音楽科教育の営みの中から、出るべくして出たものであるからです。

大分以前のことにになりますが、昭和52年に小中学校とも同時に改訂された学習指導要領は、当時課題とされていた指導内容の大綱化の趣旨に沿って、全ての教科とも大幅な見直しが行われました。

因みに記述量を単純にページ数で比べてみただけでも、小学校が29ページから12に、中学校は22から8ページにと減少しており、ぐっとスリムになっています。

音楽科では、それまで指導内容が5つの領域に分けて示されていましたが、その領域が「表現」と「鑑賞」の2つに大きく括られ、指導内容も骨格に絞り込んだシンプルな文章で示されましたので、学習指導計画の構築には教師の創意工夫が大幅に生かせる余地が増しました。領域の双方を関連付けた授業の研究も盛んになり、学習指

導の進め方自体も〈教材を教える〉から〈教材で教える〉方向へと大きく転換していきました。以後、音楽科の学習指導の主流となって今日に至っている「主題による題材」での指導もこの頃にスタートしたのでした。

特に目立ちはしませんでした。音楽科教育の指導にとっての大きな転機となっただけに、昭和52年の学習指導要領の改訂は、〈昭和の大改革〉と呼んでも過言ではない重みがあったのだと思っております。

ところで、現行学習指導要領の内容の一つとなっている〔共通事項〕の大半が、実は昭和52年以降に改訂されたどれにも指導内容として書き表されています。ただそれらが、指導内容の本文の中に文章で表されていたのでそちこちに散在する形になってしまい、子どもたちの〈音楽力〉を培うためのベーシックなキーワードとしての影は薄く、またそのようにはとらえにくかったのだと思われます。しかし、実際にはそれと意識した、あるいは別として〈音楽力〉を高めるための指導は連綿と続けられていたわけです。先の小松先生の「新設といいますか…」という切り出しには、この辺りの思惑がこもっていたのだと想像しております。

何れにせよ今回〔共通事項〕としてキーワードが1か所にまとめられたことにより、ずっと続けられてきた子どもたちの〈音楽力〉を高めようとする指導は、的を絞った形で一段と活動し易くなったわけです。取り出して示されたことの真意に沿うべく、指導計画を含めたよりよい学習指導のあり方を、いろいろと工夫してみたいと思います。

初めに〔共通事項〕ありきではなく、〔共通事項〕を教え込むでもなく、評価等に役立てるのは二次的なことであること。その外にも多くの収穫があった今回の座談会でした。〔共通事項〕を生かした指導の着地点はどこであるのか……。常にそこに向かって進んでいく努力を怠らないことによって、子どもたちの音楽的な〈音楽力〉が更に高まることを願って会場を後にしました。

学校音楽とアウトリーチ

第2回 音楽アウトリーチで育つもの

佐野 靖（東京藝術大学教授）

「協働」の醍醐味

音楽アウトリーチの活動に欠かせないのが、「協働（コラボレーション）」です。すなわち、音楽を提供する音楽家たちと受け入れる学校側（教師と子どもたち）、ときにはそこにコーディネーターも加わった協働によって、アウトリーチの活動は成り立っているのです。どのような形態のアウトリーチでも、学校側と演奏家及びコーディネーターとの間で、さらには演奏家同士、演奏家とコーディネーターとの間で「対話」が成り立たなくては、アウトリーチの成果は期待できません。

特に楽器体験などのワークショップが中心となるようなアウトリーチでは、より入念な対話が必要です。何年生の子どもを対象とするのか？体験する子どもたちの数は？場所は音楽室なのか体育館なのか？楽器の調達・確保はどうするのか？教材をどうするか？時間配分は？等々、様々な前提や制約をクリアしなければなりません。それでも、本番では、予想しなかった出来事が起こり、臨機応変な対応が求められます。

こうしたプロセスには、共感や協調もあれば、ときには感情的な反発が生まれるかもしれません。協働には、様々な「情動的な色合い」が伴います。しかし、異なる経験や価値観、感覚をもっている他者とかかわるからこそ、いろいろなものを得ることができます。つまり他者と協働するからこそ、「新たな

学び」が成立するのです。音楽家たちにとっても学校側にとっても、アウトリーチは、いわば「非日常」の活動です。非日常的な環境の中での協働は、固定観念を打ち破り、新たな学びや「自己変容」の可能性を広げてくれます。

ここに、学校での音楽アウトリーチの醍醐味があります。音楽家たちにはそうした協働を楽しみ、自己変容を経験してもらいたいと願っています。協働の醍醐味を楽しめない音楽家たちには、短絡的にアウトリーチに参加してほしくないとさえ思っています。

「実感」の言語化

私自身、音楽アウトリーチにかかわって多くのことを学んでいます。ここでは、「実感」を言語化することの大切さを痛感した事例を2つ紹介することにします。

一つは、高等学校の鑑賞でアウトリーチに行った時の話です。バッハの無伴奏ヴァイオリンソナタ第2番の第1楽章を演奏する前に、奏者は「音楽を聴いて感じたことを自由にイメージしてほしい。情景や物語を想像してくれてもいい。正解とか間違いはないから」と生徒たちに投げかけます。通して演奏した後、生徒とイメージや思いを交流し、今度は自分はこうイメージしながら（例えば「暗い教会で一人で佇んでいる」とか「希望の光が差してきた」

など）この部分を弾いていると、説明を加えながら演奏します。これらの言葉は、演奏者の「実感」から出たものであるからこそ、一層生徒の心に響きます。しかもその奏者は、「この曲を長年弾いているけれども、新しい気づきが今でもある」と語り、イメージが「更新」されていくものであること、そして、感じたことやイメージしたことに「確信」をもてるまで練習することを合わせて伝えたのです。

日常の鑑賞活動では、時間等の制約もあり、「共通事項」を手掛かりとした聴き方を指導することが多くあると思います。それも重要な聴き方であることは確かですが、ライブな演奏や語りによるアウトリーチでは、演奏者の実感と生徒たちの実感を自由にクロスさせる試みも可能です。多様な聴き方を経験できる場として、アウトリーチは大きな教育的可能性をもっています。

次は、音楽づくりの授業（小学校5年生）に打楽器奏者2人がゲストティーチャーとしてかかわった事例です。場面は、子どもたちがグループで、仕掛け絵本からイメージしてつくったテーマを中間発表する題材4時間目。打楽器奏者は、どのグループに対しても、「どんな感じの音がほしい？どんなつもりで音を出している？」と問い掛け、子どもの思いやイメージに即して、すぐに子どもでもできるレベルで多様な打ち方、音色を変化させるヒントを示します。そして、「どんな音がほしいかい

メージする」ことの大切さ、「思いは必ず楽器に伝わる」ことを言葉で伝えます。この言葉は、常に奏者自身が「こんな音を出したいと念じている」から説得力が違います。

例えば、ジャンベの子どもには、「ばひゅーん」とオノマトペ的に音をイメージさせ、バスケットボールを扱う感覚を引き合いに出して皮を打たせます。「ミステリアスな音」がほしいマリンバの子どもには、マレットを鍵盤に置いてみることを試させ、音色を探ります。言葉、身体感覚と音を結ぶことによって、子どもの出す音は明らかに変化します。

また、4人グループの中での「対話」を常に意識させようとする打楽器奏者は、「いじわるしようか」という言葉で、繰り返すテーマの音型に「変化」を加えます。「いじわる」とは「仕掛け」のこと。あるパートが合いの手のような音を即興的に入れたり、「トン・テン・カン」と反復する音型に、「二つ目の音を急に弱くして、他のパートの人をびっくりさせよう」と強弱の変化を工夫させたりします。そうした即興的な遊びを楽しむ中で、子どもたちの音楽は、反復や変化、問いと答えといったしくみを自然に、しかも必然的に取り込んだ音楽として構成されていくのです。

打楽器奏者によるアウトリーチの感想で、「音楽は生きている！その場でつくる！」という子どもの言葉は、殊更印象的でした。相手に合わせたり変えた

りすることの楽しさを実感できた子どもたちは、一層音楽づくりの活動に主体的にかかわるようになります。音楽専科によれば、次の時間では、それまでそれほど積極的でなかった子どもがマレットを変えたり奏法を探ったりし、比較的小となしいと思っていた子どもが、即興的な活動で打楽器奏者にリーダー的な役割をまかされたことで、自信をもってグループのとりまとめをするようになったとのことです。

このように、子どもにも教師にも何らかの新たな気づきがあったということは、アウトリーチという協働の場が、誰もが変容する可能性をもった学びの場であることを物語っています。



コウケンテツが贈る 世界の食文化と音楽

第3回 いただきますの気持ちをもって



vol.21からお送りしてきたこのコーナーも、今号で最終回となります。この企画は、音楽と服飾の関係を探った「ミューズのワードローブ」の流れを受け、食と音楽にはいったいどんな共通点があるのだろうか？という素朴な疑問からスタートしました。取材を通して感じたのは、食事は生きるみなもとであり、喜びであり、美であり、コミュニケーションである…ということです。一緒に食べることでつながりあえる力があるということ、これは音楽についても同じことが言えるのではないのでしょうか？たくさんのお話をしてくださり、考える機会を与えてくださったコウケンテツ先生に感謝いたします。

(取材・構成：ヴァン編集部／イラスト：ソリマチアキラ)

「おいしい」とは…？

コウ：僕は、食を楽しみたい派なので、美食とは少し違うかなあ。子どものころ隣の家に遊びに行ったときに「今日遅くなったから食べて行き」と友達のお母さんが出してくれた、市販のルーをぼんぼん入れたカレーの、なんとおいしかったこと。だから味ってそういうことではないんだと思います。

基本的に僕は「出されたものは最後までおいしく食べる」と教育されてきましたが、それは今の仕事にも生きています。海外で初めて出される料理…例えばラオスでは、バッタ、コオロギ、カメムシ、ハチの幼虫をそのままの形でいただきました。これは地元では貴重なタンパク源で、高価な食べ物なんです。だから僕は

「いただきます」と言ってパクパクいただきます。やっぱり出されたものをおいしく食べる、日本の「いただきます」という感謝の言葉は、ハートの部分ですね。

——味わうことのすばらしさとはなんでしょうか？

コウ：味そのものの自体を味わう楽しさもありますが、やはり人と人をつないでくれることだと思います。いろいろな国に行って感じたことですが、うまい料理、うまい酒、いい音楽。これは絶対に裏切らない。一気にその場が楽しくなります。おいしい料理を分かち合う。言葉が通じなくても、「これ食べてみて？」「うまいね！」「乾杯！」「踊ろう！」。簡単に国境を越えられるんで

す。しかも不思議なもので、料理って(あ、この味どこかで…)と記憶をよみがえらせてくれますよね。音楽も同じようにどこかで聴いたものを街中で耳にすると、ふとフラッシュバックして、いろいろなことを思い出します。僕はあれが好きなんです。

食べたらなにが入っているかわかる？

——音楽を聴いただけで楽譜を起こせる人がいるように、料理を食べてなにが使われているのか分かるものなのでしょうか？

コウ：一応、できるって書いてもらってもいいですか？(笑) いちばん困るのが、けっこう変わった料理を食べに行ったら「コウさん、これなにが入ってるの？」ときかれることです(笑)。そもそも味覚とは味を楽しむためのものではありません。例えば森に行ったときにおいしい果物があつた。食べてみよう。うわ、苦い！吐き出せ！と指令を出す、命を危険から守るための最終防御機能なんです。苦い＝毒ですから。そのためか味覚は苦みに対して敏感ですが、うまみに対しては鈍感ら



しいです。インスタントラーメンを「これはどこそこの有名なシェフが作ったラーメンです」と言ってみると、みんな「ほう、ピリッとしてうまいな」と言う。味覚は視覚や香り、その他の要素にもものすごく作用されるので、実際になにが入っているか、ということは相当訓練しないと分からないものなのです。

いただきます！

——日本では食事の前に「いただきます」と言いますが、欧米ではサーブされるときに「Enjoy !」「Bon ^{ボナペティ}appétit !」などと言われます。

コウ：東アジアなどの仏教の国では、黙って食べるのが美德だという考えから、静かに食事をする人が多いですね。もともと「いただきます」というのは「命をいただきます」という仏教的な考え方からきています。アジアでも食を楽しむというところは多くありますが、元来そういう考えは欧米的なものなのではないでしょうか。韓国は仏教から儒教に変わったので少し違って、当然「いただきます」「ごちそうさま」もありますけれど、お店の人は料理を出すときに必ず、「マシッケトゥセヨ(おいしく召し上がってください)」と言います。「Enjoy」みたいなものですよ。

ごはん食べた？

——韓国のソウルフードとはなんですか？

コウ：やっぱり韓国も米とみそ汁じゃないかな。韓国のみそ汁はテンジャン味噌という、発酵した韓国独特の味噌を使います。それから保存食です。日本でも昔は佃煮などをおばあちゃんが作っていたと思いますが、朝鮮半島は貧しい時代が長かったので、いかに野菜を長もちさせるかという知恵がものすごくあります。代表的なものはキムチやナムルで、種類も豊富です。韓国でごはんを食べると、頼んでもいないのにまず前菜がたくさん並びます。これは保存技術の多さを示すものであり、また文化的に食べ物をシェアするという考え方が根底にあるからなんです。今でも挨拶するとき「アンニョンハセヨ」以外に、「ごはん食べた？」って言うんですよ。

——「ごはん食べた？」ですか？

コウ：はい。若者どうしても町で会ったら「おう、ごはん食べ

た？」ってききます。今では単なる挨拶になっていますが、昔は本当に「ごはん食べた？」ってきいて、食べていたら「この人は生活も健康も万事うまくいっている」けれど、食べていなかったら、持っているものをあげるんですよ。僕も子どものころ、来客があれば母親は必ず「ごはん食べた？」ってきいて何時であつてもごはんを出していました。逆に僕ら家族が違う家に行ったときは、ごはんをよばれるんですよ。お客さんがいつ来てもパッと出せるように、保存食がいっぱいあるし、お客さんが来たらまずテーブルに並べます。これは風習と食がミックスされたところですね。

映画の中の食事

—— 映画で、食事のシーンが印象深いものはありますか？

コウ：いい映画って、いい音楽と食事のシーンがありますよね。多すぎてどれを挙げていいのか迷いますが、やっぱり『ゴッドファーザー』かな。イタリア移民の人たちの食生活がよくわかるし、重要なシーンでは、よくごはんを食べていますよね。

—— アラン・ドロンが主演した『太陽がいっぱい』や、日本の映画では小津安二郎監督の作品にも、食事シーンが出てきますね。

コウ：『太陽がいっぱい』ではナポリの市場の様子や、食事のマナーについてやりとりする場面などがあります。そんな視点で映画を観るのもとても興味深いですよ！



映画『太陽がいっぱい』より

お料理は足し算？それとも引き算？

コウ：料理を始めたときは、引き算だと思っていました。素材の味を生かして、だしとちょっとの塩！って。でも、い

ろいろな国をまわるようになってからは、どちらでもいいと思うようになりました。インドのようにスパイスを重ねている国もあれば、シンプルに干しただけの肉を食べるところもある。要はその国に合ったものだということが大事なんだと思います。それが文化ですから。守られてきた味だからこそ大切だし、尊重すべきなんだなと思います。

食事を通して責任感を！

—— 子どもの好き嫌いにはどう接していけばよいでしょうか？

コウ：それこそ、一緒に料理を作ることです。僕は「子どもの料理教室」ということで、保育園や小学校で子どもと一緒に料理を作ることがあるのですが、お母さんたちがびっくりするんですよ、「うちの子がシイタケ食べてる…」って。自分で作ることによって「こいつ食べてや



らなあかん」っていう責任感と感謝の心が生まれるんですね。責任感が伴わないと「残さず食べなさい、好き嫌いしちゃだめでしょ」と言われても子どもは絶対に理解できません。うちの子どものも食べないものがあったら、その食材でなにか一緒に作るようにしています。最初はブロッコリーを食べませんでした、一緒に焼いてみたらよく食べるようになりました。

——学校では給食で「食べ終わるまで遊びにいつてはいけません」と言われて泣く子どももいますよね。そういう場合はどうしたらいいのでしょうか？

コウ：給食の場合は非常に難しいですね。…今はセンターから給食が送られてくる場合もあるのでなかなか難しいと思いますが、例えば給食のおばちゃんと話をする機会を作ってもらったり、給食を作る行程の話を聞いたりするのはどうでしょうか。実現させるのは本当に大変だと思います。でもそういう人に話をしてもらうだけで、子どもは変わりますよ。だって嫌なものを子どもは食べないですもん。同じメニューを調理実習で作るのもいいかもしれないですね。



コウさんからのワンポイント・アドバイス

かんたんプルコギ丼～野菜をたっぷりとうろう！

初心者でもできる、と僕がよく勧めるのは韓国風焼き肉のプルコギです。すごく簡単なんですよ。

牛肉でも豚肉でも、薄切りを特価で買ってきて食べやすい大きさに切ります。あとは、タマネギ、ピーマン、シイタケ…モヤシやネギもいいですね。とにかく全部薄切りにして、ボールに入れる。それに、醤油と酒と砂糖、ごま油をもみ込む。あとはゆっくり炒めてうまみを出すだけ。肉も野菜も

たっぷりなので、栄養価も高いです。これを韓国の人は葉っぱに巻いて食べたりしますが、そうするとさらに野菜を食べることができますよね。

時間がないとき、これをごはんのにせたら、プルコギ丼のでき上がり。辛いのが好きな人は唐辛子を入れたり、パンチがほしいければニンニクを入れたりしてもいいですよ。これをテーブルに出すと「よく作ったな！」と感心されます(笑)。野菜たっぷりで色も鮮やかだし、醤油ベースだから、日本人の舌にも合う。これは本当におすすめです！

こう・けんてつ(高 賢哲)

大阪府出身。料理研究家である母・李映林主宰のeirin's kitchenにてアシスタントを経験後、2006年に独立。

韓国料理を中心に、素材の味を生かしたヘルシーなメニューに定評がある。現在は雑誌や本、テレビ、ネットコンテンツ、イベントなど多方面で活躍中。講演会などでは自身の経験をもとに、家庭での食のあり方、食を通してのコミュニケーションを広げる活動に力を入れている。



Information

2013年秋以降に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会

10月 October

●11日(金)

旭川市民文化会館大ホール 他

第55回北海道音楽教育研究大会 旭川大会

大会主題 「豊かな感性と確かな力をはぐくむ音楽教育の創造」

事務局 旭川市立神居東小学校内 佐野信孝

TEL 0166-62-2932 / FAX 0166-62-2720

●24日(木)・25日(金)

アクロス福岡シンフォニーホール 他

第54回九州音楽教育研究大会 福岡大会

大会主題 「味わおう 音楽のよさや美しさ

伝えたい 心をつなぐ音楽の喜び」

記念講演・演奏 藤原道山(尺八奏者)

問い合わせ先 福岡市立横手中学校 校長 西村幸司

TEL 092-501-6451 / FAX 092-501-6452

●25日(金)

三重県総合文化センター 中ホール 他

第13回東海北陸小中学校音楽教育研究大会 三重大会

大会テーマ 「響く音の輪、輝く笑顔」

事務局 津市立櫛形小学校 教頭 松岡みつ子

TEL 059-237-0851 / FAX 059-237-5337

11月 November

●1日(金)

日立システムズホール仙台(仙台市青年文化センター)

仙台市旭ヶ丘市民センター

第61回東北音楽教育研究大会 仙台市大会

大会主題 「つなげよう音を つながろう人と

～音楽の力で 明日の笑顔を～」

事務局 仙台市立旭丘小学校 校長 高橋純子

TEL 022-233-5060 / FAX 022-271-4485

●8日(金)

前橋市民文化会館 他

第55回関東音楽教育研究会 群馬大会

大会主題 「心ふれあう 豊かな響き」

事務局 前橋市立大利根小学校 校長 島津 浩

TEL 027-252-8111 / FAX 027-252-8122

●15日(金)

防府市公会堂 他

第44回中国・四国音楽教育研究大会 山口大会

大会主題 「伝えよう音楽 つなごう心」

問い合わせ先 防府市立富海中学校 教頭 上田良夫

TEL 0835-34-0023 / FAX 0835-34-0296

12月 December

●13日(金)

東京都文京区立明化小学校

第20回全日本小学校管楽器教育研究大会・東日本大会

研究テーマ 「伝えよう ぼくの私のハーモニー」

～音楽科授業における

管楽器活用と音楽活動の充実～

問い合わせ先 青梅市立第三小学校 橋本 研

TEL 0428-31-7266 / FAX 0428-32-7024

— 新作合唱曲による公開講座 —

Spring Seminar

2014

2014年3月23日(日) 津田ホール(渋谷区)

コンクール自由曲向けの新曲発表の会です。

指揮者による指導ポイントの紹介や作曲家自身による楽曲解説も。

司会：藤原規生

出演：大田桜子 佐藤賢太郎 ほか

合唱団：八千代少年少女合唱団 harmonia ensemble ほか